事件４「まだらの記憶」

1

「銀助？　アーサーはどうした？」
「出かけてますよ。朝からずっと」
ベーカー街２２２Ｂ。
大学から帰宅したコナン・ワトソンに、リビングにいた夏目銀助は、妙にうんざりとした態度で答えた。
コナンはコートを脱ぎ、コート掛けにかけながら、
「どこに？」
「さあ？　どうせ先日の件で調べ物だと思いますけど」
「またか。このところ、毎日だな」
「そりゃまあ、徹頭徹尾、訳がわからない事件でしたからね。知りたがりのアーサー君としては、居ても立っても要られないんでしょう」
「知りたがり？　アーサーが？」
「いつも言ってるじゃないですか。好奇心は発想の種だって」
銀助の言い分に、ああ、とコナンも同意する。発明家を自認するアーサー・ホームズが、主義に反して探偵の真似事をする際の口癖だ。彼が事件の解明に奔走するのは、己の好奇心を満たすためなのである。
コナンたちがメリーウェザーの屋敷を訪れてから、すでに一週間が経っていた。
あの騒動は結局、「世間を騒がす大事件」などには発展しなかった。屋敷を訪れたインタビュアーたちが身分を詐称して屋敷に不法侵入しているが、「犯罪」と呼べるのはそれぐらいだ。後日アーサーが調査した結果、《愛猫組合》なる愛猫家たちの私的団体は以前から存在しており、コンテストも正式な手続きを踏んだ上で催されたものだった。賞金にせよー優勝したメリーウェザーはその場で全額を組合に寄贈しているのだがー形式上は問題なく支払われているのである。
ただ、その《愛猫組合》のメンバーたちは、屋敷を訪れた三人組のことを、誰一人把握していなかった。唯一、インタビュアーのビンセントはコンテスト運営の中核メンバーだったらしく、覚えている者が大勢いた。が、同行していたカメラマンと大男を見知っていた者はおらず、ビンセントに関しても素性まで知っている人間は皆無だった。
あの三人組は、本来《愛猫組合》と無関係なのだ。表に出てこない愛猫家のメリーウェザー

を誘き出すために、《愛猫組合》を利用しただけなのである。おそらくは、彼の屋敷に侵入するために。

「……いや、しかしだな、アーサー？　屋敷に侵入するだけのために、なんでそんなに回りくどいことを？」

話を聞いたとき、コナンは率直な疑問を口にした。

すると、アーサーは険しい顔つきで、

「まさに、そこがこの一件の要諦と見るべきだ。あの老人に接触する手段など幾らでも考えつきそうなものなのに、あえて、こんな手法を取った。そこに、この事件ーーこの計画を立案し、遂行した人物の『人となり』が現れている」

と、重々しく答えたものだ。コナンなど、単に悪趣味なのではと思えるのだが、アーサーには彼なりの「感触」があったらしい。

実際、あの騒動は「世間を騒がす大事件」にこそならなかったが、「世間に知られざる大事件」ではあったのだ。何しろ、スコットランド・ヤードの警部が「引退したいまも政府各所に結構な影響力をお持ちの方」と評する政財界の影の大物が、あの日を境に「乱心」状態に陥っているのである。それこそ「人が変わった」ように。

おかげで、ニュースにはなっていないが、現在イギリス共和国の中枢は大わらわらしい。しかも、その事態を巻き起こした犯人への手掛かりは、ほとんど何もない状況なのだ。

「……いや」

まったくないわけではない。現にアーサーは、日頃の引き籠もり振りを返上して、連日奔走している。

たとえば、

「仮面の意味がわかったよ」

あの日、アーサーは悔しさと興奮が綯い交ぜになった口振りで、そう言った。

「あのとき奴は、メリーウェザー老に呼びかけ、振り向いた彼と視線を合わせた。そして、あの老人を『変貌』させてしまった。屋敷の警備体制を鑑みるに、事前に薬物を摂取させていた可能性は低い。皆無とは言わないまでも、ほぼゼロだろう。つまり奴は、ただ『目を合わせる』だけで瞬時に人格を変えてしまうほど強力な催眠術を使うんだ」

アーサーの意見に対し、コナンは珍しく反論した。少なくともコナンが知る催眠術というものは、それほど簡単なものではない。対象の深層心理にまで作用するような「本物」の催眠術となればなおさらだ。そこには必ず科学的な仕組みーーこの場合は、おそらく薬物学的な、また心理学的なアプローチが隠されているはずである。そうでなければ、「人を変える」、それも不可逆的に変化させてしまうほど強い作用が生じるはずがない。

しかし、

「ずっと気になっていたんだ。《ジャック・ザ・ナイトメア》は、なぜあんな極端に視界が悪い仮面を付けているのか。何かしら宗教的な意味があるのかと予想していたがーー違う。

あれは、奴の催眠術対策だ。奴と『目を合わせない』ために、彼らはあんな不自由をしてまで、仮面を付けていたんだよ。そして、この事実が逆説的に、奴の催眠術の危険性を示している。奴が《ジャック》の敵であるように、《ジャック》にとっても、奴は強力な敵なんだ」

アーサーの話では、ウィリアム・クラムの宝石店に割れた仮面を残したのも、ロジャー・ステイプルトンに仮面を渡したのも、アーサーの言う「奴」で間違いないそうだ。

敵対する立場と言うなら、なぜ彼が敵方の仮面を持っているのかわからなかったがーー

「奪ったに決まってる。『敵を殺害してきた』のが《ジャック》側だけなはずがない」

アーサーのその台詞は、ある意味、極めて重大だ。

というのも、これまで無差別殺人と見なされていた《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行が、実は「無差別ではなかった」ことを示唆しているからだ。

「薄々わかってはいたことだ。《ジャック・ザ・ナイトメア》というのは、単なる殺人鬼ーー殺人集団ではない。彼らは、奴が催眠術で獲得した《解放者》を標的にしているんだ。つまり、《ジャック》の連続殺人は、敵対する二つの組織の、抗争の片面なんだよ」

正直なところ、あまりに荒唐無稽に聞こえた。何しろ、アーサーの言い方だと、これまで《ジャック・ザ・ナイトメア》に殺害されてきた犠牲者たちはすべて、メリーウェザー邸に侵入した「奴ら」の一味だったということになる。

モリアーティ、なる人物の。

そんなことがあり得るのかとコナンは思ってしまうが、アーサーの中で彼の「推理」は、「確信」に近いらしい。ただ同時に、彼自身、自らの「推理」がすぐに受け容れられないことはわかっているようだ。だから、いまこうして、独りだけで動き回っているのである。コナンにすら何も言わずに。

ただ……。

今回に関していえば、正直、助かっていた。

アーサーには言っていないが、実はいま、コナンもまた個人的に動いているのだ。

「……あいつ……」

アーサーに「モリアーティ」と名乗った男。

その正体は、かつてこの部屋に依頼に訪れたアイリーンと同一人物だそうだが、実際鉢合わせコナンも、彼がアイリーンと同じ顔なのは認めざるを得なかった。男とは思えない、ゾッとするような美形だ。

ただし、コナンにとって「彼」は、「アイリーン」だけではなかった。ずっと忘れていた――埋もれていた記憶が、彼の素顔を目の当たりにしたとき、コナンの中から浮かび上がってきたのだ。

それは、兄の死に関する記憶。

「間違いない。あいつだ」

兄が暴漢に襲われて命を落としたとき、コナンはその現場に居合わせた。

だが、なまじ死の瞬間を目撃したため、ショックが大き過ぎたのだろう。兄が殺された前後の記憶が曖昧になり、思い出せなくなった。コナンが心理療法について個人的に学んでいるのは、あのときの記憶を取り戻す術がないか知りたかったからだ。

ところが、先日メリーウェザーの屋敷でモリアーティを見た瞬間、忘れていた記憶――その断片が鮮やかに甦ったのである。

我ながらすぐには信じられなかった。

兄が死んで、もう三年。それが、兄とはまるで関係のない事件の最中に、突然彼の死が甦るなど、予想できるはずがない。

だが……事実なのだ。

詳細はいまもまだ、思い出せずにいる。

しかし、兄が死んだとき、その場にモリアーティがいたことについては確信を得ていた。

「あいつが……」

兄を殺した犯人なのだろうか？

その可能性は極めて高い。何しろ、兄の死の記憶に登場するのは、三人だけだ。死んだ兄と生き残った自分を除けば、残るは一人。兄を殺した犯人だけである。

ただ、だとすれば……。

「……」

コナンはテーブルの椅子に座ったまま、リビングの隅にある主が不在の作業机をにらんだ。

胸の奥から様々な感情の泡が生じ、浮き上がっては弾けている。泡を生む源泉が、ぐつぐつと煮えている。これは多分「良くない熱」だ。だが、自分でも抑えることができない。

アーサーは、コナンが兄の死に関する記憶を失っていることを知っていた。以前教えた事があるのだ。

しかし、モリアーティを目撃したことで、その一部が甦ったことは知らせていなかった。捜査に入れ込むアーサーの態度と、コナン自身の感情の間に、隔離を感じたからだ。無論、このまま黙っているつもりはない。と言うより、同居している以上、秘匿し続けるのは現実的に無理があるだろう。

それでも、まず先に、自分で確かめたい。そんな思いが、コナンに告白を躊躇させていた。
「ーーあ。また時間ですね。ええと、次は、これか」
銀助の声に、コナンは我に返った。気がつけばかなり長い間物思いに沈んでいた。これではアーサーのことを馬鹿にできない、とコナンは密かに苦笑した。
テーブルの反対側に座る銀助を見る。
そしてーー実のところ、帰宅したときからずっと気になりつつ見ない振りをしていた、ある質問を投げかけた。
「……で？　いまさらだが、銀助。お前、ここで一体、何をしてるんだ？」
アーサーが留守にもかかわらず、銀助はコナンが帰るまで、一人でリビングに残っていた。そして、銀助の前のテーブルには、およそ十個ほどの見慣れぬ機械が並べられていた。
それぞれサイズが違い、一番小さい物はなんなくポケットに入りそうだが、一番大きい物は両手で抱えきれないほど大きい。共通しているのは、どの機械にもひとつボタンが付いていることだった。
「アーサー君の実験ですよ」
と、機械のひとつを手に取ってボタンを押しながら、銀助は疲れた声で言った。
「ビーコンってわかります？」
「ああ。電波で居場所を知らせる機械だろ」
「その実験なんですって。せっかく外をうろつき回るんだから、無駄にしたくないんだそうで」
「じゃあ、そこにあるのは全部ビーコンなのか？　なんでそんなにたくさん要るんだ？」
「これはどれも試験機で、電波の強さと持続時間が違うんですよ」
銀助の説明によると、彼はあらかじめ決めておいた時間に、試作機をひとつずつ作動するよう依頼されたらしい。つまり、いまごろは外出中のアーサーも、受信機を使って各ビーコンの性能をテストしているのだろう。
『小型で強力で持続時間の長いビーコンさえあれば、奴らを追跡できたんだ！　開発は急務だ！』って鼻息を荒くしてましたよ」
「……そこは相変わらずの平常運転だな」
捜査に奔走する傍ら、発明品の開発も進めているらしい。せっかく外出するのだから、と言う辺りが、いかにもアーサーらしかった。
コナンは一番小さいビーコンを手に取り、
「まあ確かに、これぐらい小さければ、相手もすぐには気付かないかもしれないが……これでどれぐらい時間が持つんだ？」
「そのタイプだと、良いとこ十秒弱のはずです」

「……実用化は遠そうだな」
十秒間の追跡なら、走って追いかけた方が間違いなく早い。とはいえ、開発にかけるアーサーの情熱は並ではない。気がつけば、こっそり忍ばせたビーコンでコナンの行動がすべて筒抜けにーーなどということもあり得ないわけではない。今後自分の持ち物には神経を尖らせようとコナンは心の中でメモを取った。
「それでも、《Eソード》だの《Eガン》よりはマシか。爆発でもしない限り、負傷者が出ることも……しないよな、爆発？」
「ビーコンの危険性はわかりませんが、負傷者なら別件で出るかもしれませんよ」
「おい。なんだ、その不吉な物言いは」
「何しろ不吉なことですから。聞きます？」
「聞きたいわけがないだろう」
「アーサー君、スコットランド・ヤードが回収した自動機巧人形（アウトマタ）に興味津々です」
「……」
「一昨日レストレード警部から相談されました。気付かれない内に署で処分したいが、これはどれぐらい貴重な物なのかって」
「……なんて答えた？」
「大英博物館に入ってもおかしくない物ですって」
「なぜ答えた！？」
「いまでは失われた職人技術の結晶ですよ！？　世界に誇る、日本の発明品です！　嘘なんか吐けるわけないじゃないですか」
「ああ、聞きたくなかった……と言うか、俺は聞きたくないと言ったのに……！」
「やだなあ、水臭い。私たち、友達じゃないですか」
ふふふ、と暗い笑みを浮かべる銀助。おそらく、自分だけ胃の痛い思いをするのが嫌だったのだろう。なんとも友達甲斐のある青年だ。
朝起きて朝食を取りにリビングに入ると、テーブルにあの鎧武者が座っている日が、いずれ来るのだろうか。もしそんな未来があり得るなら、ルームシェアの解消を真剣に考慮すべきかもしれない。
そう、コナンが新たな悩み事に頭を抱えたときだ。
「アーサー君いる？　依頼人、連れて来たよ！」

＊

ハドソン家の次女、マリー・ハドソンが連れて来たのは、三十歳前後に見える女性だった。またしても女の依頼人ーーと思ってすぐ、一人例外がいたことを思い出し、コナンはつい顔をしかめた。
アーサーの不在を告げてもマリーは気にせず、依頼人の同意も取らないまま、「じゃあ、待つわ」と彼女を椅子に座らせた。
仕方なくコナンと銀助が挨拶すると、依頼人は暗い表情で、
「ヘレン・ロイロットと申します」
と名乗った。
美しい女性だが、見るからに意気消沈している。その原因が今回の依頼だとすれば、かなり深刻な内容になりそうだが。
「ヘレンさんとは、昨日、取材先で知り合ったの。それで、ずばりその取材内容が、今回解決してもらいたい事件なのよ」
「マリーが取材？　なんの？」
質問するコナンに、マリーは眼鏡の位置を直しつつ、ちらっとヘレンの様子をうかがってから答える。
「焼身自殺」
う、とコナンは顔を強張らせた。予想以上に重たい話だ。それでもなるべく平静を装ったのは、おそらく自殺したのが依頼人の関係者だからだった。
案の定、
「自殺なんかじゃありません。彼は、自殺なんかする人じゃ、ありませんでした……」
ヘレンは顔をうつむけたまま、絞り出すように言った。
コナンは気まずい思いで言葉を探すが、そう簡単には見つからない。隣で銀助が、部外者は一刻も早く席を外したいと、無言のオーラを出すのがわかった。もちろん、友達をのけ者にするような水臭い真似をするつもりはなかったが。
「亡くなられたのは、貴方のお知り合いですか？」
「……はい。名前はパーマー・アーミテージ。夫の助手を務めていました」
「助手？」
「夫は学者なんです」
「なるほど。それで……ミセス・ロイロット。貴方は、被害者は事故死ーーもしくは、何者かに殺されたとお考えなのですね？」
コナンはあえて確認したが、ヘレンが「事故」だと考えているなら、わざわざアーサーの元に依頼に来たりしないだろう。

「はい。彼は……殺されたんです」
予想通り、ヘレンはそう答えた。
「ところが、現場は離れの小屋で、中から鍵が掛けられていたの。窓もね。いわゆる、密室状態（ロックド・ルーム）だったわけ」
マリーが横から説明した。取材しただけあって、事件の状況についても詳しく把握しているようだ。
「放火なら密室だったどうかなんて関係ないだろ。建物ごと焼いてしまえばいいんだ」
「あのね。小屋ごと全焼してたら、密室だったなんてわからないでしょ？　その小屋ってのは昔ヘレンさんのご主人が使ってた実験室だそうで、屋根から床まで鉄製なの。焼けたのは被害者と、彼が寝てたベッド周辺だけなのよ」
「鉄の小屋？　また変な物を……なら、何か他の手段で外から火を付けたとは考えられないか？　窓から松明を投げ入れるとかーー」
「無理よ。窓は鍵が掛かってたって言ったでしょ」
「では、時限式の発火装置を仕掛けてーー」
「自分のベッドにそんなのがあったら、さすがに気付かないわけないと思うけど？　それに、そんな装置があったなら、燃え跡からわかるでしょ」
「ーーあ。では、こういうのはどうですか？　レンズを使うんです。凸レンズで太陽光を集約すれば、かなりの高温になりますからね。色の濃い物や燃えやすい物なら、十分火を付けることがーー」
「銀助君。せっかくのアイデアを否定して悪いんだけど、火の手が上がったのは、真夜中なの」
「……導火線を引いていたとは考えられないのか？」
「それだって普通は寝る前に気がつくはずだし、そもそもそんな痕跡は見つかってないわ」
「で、では、鼠や蛇と言った小動物を使うのはどうです？　少しでも隙間があれば、火の付いた何かをしっぽに結んで忍び込ませてーー」
「その火をベッドに燃え移らせるの？　曲芸師じゃあるまいし、そんなの簡単にできないわよ。隙間だってどれぐらいあるか。そもそも、そういう余地がない状況だから、『密室』って言ったのよ」
コナンと銀助の推理を、マリーは無情に否定する。
しかし、外から火を付けるのが困難だとすれば、被害者が自ら火を付けたーーつまり自殺以外には考えられない。もちろん、マリーの説明に見落としがあるのかもしれないが。
コナンはもう一度ヘレンに視線を向けた。ヘレンは相変わらず、うつむいたままだ。
マリーに反論しないところを見ると、ヘレンが他殺だと訴えている根拠は、被害者の人柄だ

けのようだ。無論、それを頭から否定するつもりはないが……。
「助手の方ーーミスター・アーミテージが亡くなられたのは、いつなんですか？」
「はい。四日前の夜になります」
「彼が殺される理由に、心当たりがおありですか？」
「……ありません」
ヘレンの返答には一瞬の逡巡があったーー気がした。アーサーなら違ったのだろうが、赤の他人のわずかな機微を読み取ることなど、コナンには所詮無理な話だ。
「ちなみに、この件に関し、ご主人はなんと？」
「……自殺だろう、と。警察が調査に来たときも、そう言っていました」
「警察？」
「焼死なんて珍しいからね。スコットランド・ヤードも不審死と見なして、一応調査はしたみたい。もっとも、被害者は自殺したって結論だけど」
再びマリーが捕捉する。かく言うマリーが取材に赴いたのも、やはり珍しい案件だったからに違いない。
「なるほど……それでもミセス・ロイロットは、彼が何者かに殺されたとお考えなのですね？ここに来られたのは、殺害の手口を明かし、犯人を見つけて欲しいからですか？」
重ねて確認すると、ヘレンは無言のまま、しかしきっぱりと頷いた。コナンは胸中でため息を吐いた。
スコットランド・ヤードも自殺と判断しているなら、解決せねばならないのは事件ではなく、彼女の心情ということになりそうだ。とすると、彼女が頼るべきはアーサーやコナンではない。
ましてや、いまアーサーはモリアーティに迫る手掛かりを求めて奔走している最中だ。
ヘレンの憔悴振りを見るに、突き放すような真似はしたくない。だが、それでも、伝えるべきことは伝えねばならないだろう。
「ミセス・ロイロット。誠に申し訳ありませんが、貴方のご依頼を承ることはーー」

「引き受けよう！」

唐突にドアが開き、頼もしい声がリビングに響いた。
開口一番宣言したのは、誰あろう、アーサーだ。
帰宅したアーサーはコートも脱がず、ツカツカとヘレンに前に移動。目を丸くする依頼人に
「初めまして！」と話しかけた。
「僕がアーサー・ホームズです。ご依頼は確かにお引き受けします。大船に乗ったつもりでい

て下さって結構ですよ」
「って、待て待て、アーサー！　帰って早々……お前、依頼内容は聞いてたのか？」
「いや。いまさっき帰ったところだからな。聞こえたのは、君の『誠に申し訳ありませんが』の前からだ」
「要するに何も聞いてないじゃないか！　なんでそんな安請け合いしてるんだ！？」
『誠に申し訳ありませんが』の『前』が聞こえたからさ」
アーサーはしれっと答えると、ヘレンに向き直り、
「ミセス・ロイロット」
「……は、はい？」
「念のためお尋ねしますが、ご主人は、ピッチャード・ロイロット博士では？」
「そ、そうです。主人をご存じなのですか？」
「もちろん。高名な方ですから」
そう言って、アーサーは満面に笑みを浮かべる。満足げな、そして太々しい笑みだ。
「依頼の内容はこれから詳しくお聞きしますが、全力を尽くすとお約束致しましょう。どうかご安心下さい」

＊